

目次

- ・全国近代化遺産活用連絡協議会
全国大会・フォーラム開催レポート 2
- ・企画展「古い道具と昔のくらし」 3
- ・拳母から北海道へ羽ばたいた歴史家
— 伊藤初太郎氏について — 4
- ・特別展「塩の歴史と民俗 三河の塩生産と交易」 5
- ・郷土史調査レポート「越戸ダム顛末記」 6
- ・文化財シリーズ69・資料館NEWS 8

豊田市 郷土資料館 だより

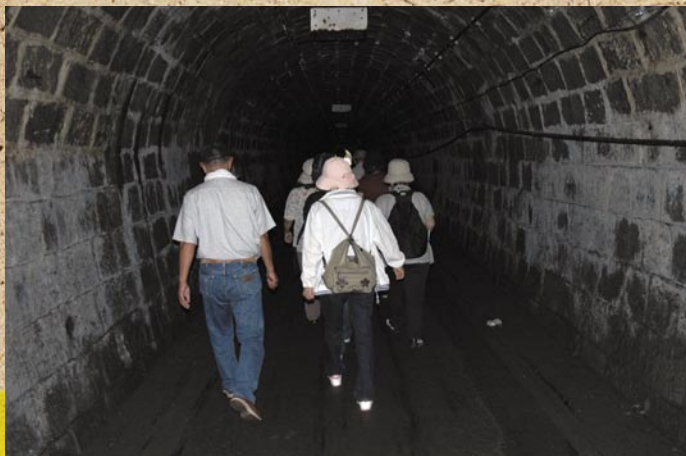
No.69

Toyota City Museum
Of
Local History



豊田市の近代化遺産をめぐる見学会の様子

いせがみすいどう (登録文化財) 上: 外観 下: 内部



ひゃくちくばくじょう (市指定文化財) 上: 樋門 下: 貯木池



全国近代化遺産活用連絡協議会 全国大会・フォーラム開催レポート

第12回を迎える全国近代化遺産活用連絡協議会全国大会が、7月23日(木)～25日(土)の3日間、豊田市で開催されました。

7月23日(木)フォーラム

フォーラムは豊田市能楽堂で行われ、全国各地から会員市、団体・個人会員の方々と豊田市周辺にお住まいの市民など約200名が参加しました。

基調講演では、トヨタテクノミュージアム産業技術記念館の布施直人館長から、「近代化遺産の活用と保存—産業技術記念館の取り組み—」をテーマに、歴史的遺産の保存と活用の考え方や今後の課題を教示いただきました。

パネルディスカッションでは、ラジオパーソナリティー神山氏のコーディネートのもと、講演者の布施氏を含む次の5名の方々に意見交換をしていただきました。

中部産業遺産研究会副会長の天野武弘氏は、近代化遺産の保存と活用に関わる最近の動向と豊田市域における近代化遺産の価値付けと課題を提言。

株式会社エイ・ワークス社長の赤崎まき子氏は、全国各地の近代化遺産の保存と活用例、川崎市における観光資源としての成功例を提示。

合資会社野田味噌商店 無限責任社員の野田清衛氏は、先代から伝えられた近代化遺産を自分の会社で活用するだけでなく、地域の財産として見直すことの必要性をわかりやすく報告。



<パネルディスカッションの様子>

寿町達磨窯保存会会長の加藤利幸氏は、地域の近代化遺産を地域の宝として、次世代へ伝承していくための取組みを報告。

討論では、新しい地域資源として近代化遺産を活用していくためには、どのような視点が必要かという論点で話し合いが進められました。地域の人々の近代化遺産に対する認識と理解を高め、地域振興やまちづくりにつながる保存と活用の方法を探っていくべきという意見でまとまりました。

能楽堂ロビーでは全国の近代化遺産の写真パネル、参加館一階ロビーでは、トヨタ自動車初の生産型乗用車であるトヨタA A型乗用車が展示され、大会に華をそえることができました。

7月24日(金)・25日(土)見学会

24日(金)の見学会は、84名の参加者とともに4コースに分かれ、豊田市内の近代化遺産をめぐり、25日(土)は足助の町並みを見学しました。



<「近代の建築美をめぐる」参加者の皆さん>

文化庁が中心となり、近代化遺産を見直し保存活用していこうというこの運動は、全国的に広がりを見せています。数多くの近代化遺産が存在する豊田市においても、地域資源ととらえることで保存と活用について考えていくよいきっかけとなりました。

(伊藤俊満)

企画展 「古い道具と昔の暮らし」

——— 平成21年7月18日(土)～10月18日(日) ———

豊田市郷土資料館では夏休みにあわせ子ども向けの企画展「古い道具と昔の暮らし」を開催しています。

今の子どもたちは電気や水道のない暮らしなど想像もできないことでしょう。この展示を通して子どもたちが、そんな時代の暮らしのことを考え「どうやってご飯を炊いたのだろうか?」「暗い夜は灯りをどうしたのだろうか?」「水はどうしたのだろうか?」といった疑問を持つことで昔の暮らしが今とは違ったことに気づき、のこされた道具から昔の暮らしを考えるきっかけとなればよいと考えています。

○第二展示室

市民から寄贈された民俗資料を衣・食・住の視点からコーナーごとに展示しています。

衣:「着物」や下駄や雪駄といった「はきもの」を紹介し、明治時代～大正時代にかけての子どもは学校に行く時も着物だったこと、農作業の時も「もんぺ」という着物を着ていたことなどは、子どもにとって驚くことのようにです。

食:「調理道具」は日常生活の上でも変化が大きなものです。電化製品が登場する以前と以後では大きく道具が変わります。道具の違いから生活の違いがわかります。



行灯 (あんどん)

住:住まいの道具は「あかり」「時計」を展示しています。「あかり」はロウソク立て、行灯、ランプと年代をおって変化していった道具、「時計」は江戸時代のおもり時計、はと時計などを紹介しています。

○民俗資料館

当館の庭に移築されている民俗資料館は江戸時代中頃の庄屋の家で、豊田市豊松町に建っていたものです。

茅葺^{かやぶき}の屋根、土間、囲炉裏^{いろり}、手杵^{ちゆうな}の跡がわかる柱、ろうかのない間取りなど、現在の住宅との違いを実際に見る事ができる実物展示です。民俗資料館の中には、古い農具やはたおり機、かまど(復元)、ランプなどがあり、生活の様子を体感することができます。



民俗資料館

○体験コーナー

現在は機械類もデジタルのものが多く、人が手と頭を使って道具を操作することさえ少なくなってきました。こうしたこともあり、実際に「台ばかり」や「さおばかり」を使って物の重さを計ってみる体験コーナーを設けています。実際にやってみると、つりあいをとるのが難しく重さも足し算をしないとわからないなど、しくみをわかっていないと道具を使うのも大変であることが実感できます。



さおばかり

その他に米の量を枡ではかる、お茶を石臼で粉にする、薬研を使って薬をきざむ、着物を着てみるなどの体験コーナーがあります。また大きさに関係なく使える風呂敷の便利な点を紹介し、風呂敷の包み方も紹介しています。

子どもにはめずらしく、大人には懐かしい展示をぜひご覧ください。

拳母から北海道へ羽ばたいた歴史家

－伊藤初太郎氏について－

「伊藤初太郎さんを知っていますか？」

電話をくれたのは、猪熊樹人さんです。猪熊さんは学生時代、考古学を専攻し豊田市の遺跡調査にも参加したことから、当館学芸員とは旧知の間柄です。現在は根室市教育委員会に勤め、「根室市歴史と自然の資料館」の学芸員として活躍していらっしゃいます。電話から数日ほどして、猪熊さんから封筒が届きました。

伊藤初太郎は明治16年（1883）5月18日、愛知県西加茂郡拳母町大字竹生（現在の豊田市竹生町）で、鈴木為吉・ヒサの四男として生まれ、後、伊藤家の養子となりました。母方の祖父 阿部定七郎は愛知県庁に勤めており、県令（知事）安場保和の勧めに応じ、ヒサの長男 阿部鏐太郎を戸主として、同22年（1889）、一家を根室郡和田村（現根室市西和田）へと入植させます。初太郎は、母が和田村から幌茂尻村へと移住するのに同行し、そこで、近隣に住まうアイヌの人々の生活と文化、畑から出土する先史時代の土器や石器に興味を持ちました。これが後に先住民族の歴史に関わるきっかけとなりました。同29年（1896）、花咲尋常小学校高等科へと進学しますが、成績優秀のため、通常は4年制のところを、初太郎は3年で修了し、さらに、札幌の北海道師範学校へと進み、卒業後、根室の弥生尋常小学校の教師となり、そして同36年（1903）、20歳の若さで幌茂尻小学校の校長となりました。

教員としての忙しい日々の中、初太郎は根室の歴史と自然の研究に没頭します。特に遺跡の調査については情熱を傾け、アイヌ民族が残した「チャシ」（高地に設けられた砦）の研究に熱中し、次々と論文を学会誌、地方誌へと発表しました。その論文は、現在でもチャシ研究の基礎を作ったものとして高く評価されています。初太郎が発信した情報に呼応するように、喜田貞吉（歴史学者 京都帝国大学教授）、清野謙次（形質人類学者 京都帝国大学教授）、伊東信雄（考古学者 東北大学教授）、岡正雄（民族学者 東京大学教授）など、日本を代表する歴史・人類・考古などの研究者達が根室を訪れ、初太郎はそれらの人々を献身的に世話したと伝えられます。

昭和8年（1933）、初太郎は病身の妻なつの看病と乳飲み子の世話を理由に教員職を離れますが、歴史研究への情熱は、同51年（1976）、93歳で生涯を閉じるまで変わりませんでした。初太郎の功績に対し、同29年（1954）北海道文化奨励賞、同32年（1957）第1回根室市文化賞、同48年北海道文化財保護功労賞、同49年勲五等瑞宝章が送られました。

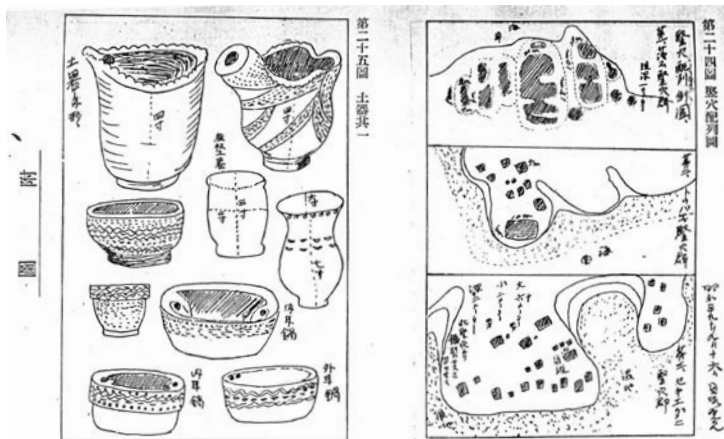
<参考・引用文献>

根室・千島歴史人名事典編集委員会編2002「根室・千島歴史人名事典編集委員会編」

（高橋健太郎）



伊藤初太郎氏



伊藤氏の記した論文
（関江谷1 堅穴群「考古学上の根室の遺物と遺跡」1935より）

特別展「塩の歴史と民俗 三河の塩生産と交易」

会期：平成21年10月31日(日)～12月6日(日) 会場：豊田市郷土資料館

塩は人間にとって空気と水とともに欠くことのできない最も身近な存在ですが、その歴史は意外に知られていません。海外では内陸の岩塩や塩湖の乾燥した塩、海水が直接乾燥してできた海塩などを利用してきました。

いっぽう、日本では岩塩は産出しないので、もっぱら海水を濃くして、さらに煮詰めて結晶を採り出す方法が行われてきました。

すでに縄文時代から、かん水を土器で煮詰めて塩の結晶を採り出す土器製塩がありました。初期のかん水をつくる技術は海辺に生育する海藻にたっぷり海水を含ませたうえで焼いて、残された灰塩を海水で溶かして、より濃いかん水を取りだす藻塩焼の方法でした。土器製塩は古墳～古代に栄え各地に遺跡がみられ、三河湾、知多、渥美半島沿岸にも多数分布しています。

やがて藻塩焼にかわり、浜辺の砂場に海水を取入れて、かん水をつくる方法、すなわち塩田が発達してきました。塩田は入浜式と揚浜式の二つのタイプがありました。入浜式は自然の遠浅の海浜で潮の干満を利用してかん水をつくる方法で、揚浜式は人力によって海水を少し高めの砂場に揚げてかん水をつくる方法です。いずれもできあがったかん水を土釜や鉄釜で焼きあげて塩を生産しました。

江戸時代に入り入浜式塩田は瀬戸内海沿岸で栄え、赤穂地方から堺、大阪、京、尾張、江戸の大消費地に送られました。讃岐、周防、備後の西海塩は北前船の発達で、日本海沿岸の都市や要港に運ばれ、日本各地に流通しました。これに対して全国各地の海岸でも塩生産は地方の需要に応じて生産が続けられ、三河湾沿岸においても、古代以来昭和30年代頃まで製塩が行われていました。

今回の特別展では三河での塩の生産や交易に焦点をあてて、その歴史と民俗の紹介を、企画しました。

塩の種類、特に海外での岩塩、湖塩、天日塩や、日本での山塩の生産についてのコーナーも開設予定。

三河湾の塩生産では三河湾、知多、渥美半島の古墳・律令時代の製塩土器をはじめ、土器製塩の実験

資料、古代の塩の流通状況の紹介。中世では田中吉政が正法寺（吉良町）にあてた塩田寄進状や乾坤院（東浦町）文書、大恩寺（豊川市）文書で塩田の所有関係の移動を知ることができます。近世三河湾では多くの村々で製塩が行なわれました。その多くが矢作川を上り岡崎塩座を介し三河内陸部から信州に運ばれました。岡崎塩座の独占は絶大で、多方面に影響を及ぼしてきました。

塩の流通も今回の展示の一つで、矢作川を上る川船の様子は川船の模型と帆柱、櫂、櫓、帆など実際に使用されていた船の部品と古写真で紹介し、塩座については古文書での展示を計画しています。陸路で名古屋から足助に入った塩、矢作川ルートで平井から足助に入った塩、巴川ルートで運ばれた塩があり、塩問屋の実態、足助での奥地の輸送に供えた直し、中馬輸送の姿を馬具と衣装によって紹介します。

塩と人の生活に関わる資料として挙母藩と近隣各藩城下町出土の焼塩壺と挙母藩関係の文書にみる塩についても触れます。

（松井孝宗）



塩杓（天保14年）

関連事業

講演会

・11月15日(日)

講師 渡辺 誠（名古屋大学名誉教授）

バスツアー

・11月7日(土)

「中馬街道の峠を越える」

・11月21日(土)

「川船の航路と土場を歩く」

（※詳細は広報とよたに掲載予定）

越戸ダム顛末記

越戸ダムは、昭和4年に完成しました。当時「水主火従」と呼ばれる政府方針の下、大規模な水力発電所が相次いで建設されており、越戸ダムも同じ時期に建設されました。そのため、矢作川の水運は途絶えてしまったとされています。しかし、かといってここ越戸地域は、決して国策に寄り切られた「うらみの地」というばかりではなさそうです。地域の人びとは、越戸ダムができて以降も、この地に深い愛着を抱き続けてきました。

越戸地域は、ちょうど地形の変わり目にあたり、交通の要衝でした。多くの荷物は舟によってここまで運ばれた後に、牛馬に積み替えられ、街道を上がって行きました。また上流の森林からもたらされる木材は、この地まで筏に組んで運ばれ、ここで一旦引き揚げられ、木材として加工されました。

またこの地域は、観光の名所でもありました。大正10年には、平戸橋勘八峡が県の新名所に選定されています。この地は元々、一大溪谷、馬場瀬、波岩の滝、枝下用水の桜並木などがあり、地域の人びとにとっては、大変に思い出のある地区でした。その勘八峡が新名所に選ばれたことから、地元では観光協会のようなものが結成されたようで、鵜飼や遊覧船、花火などが催されました。

昭和2年に着工された越戸ダムによって景観は水没し、鵜飼や遊覧船も営業を停止しましたが、その後ダム湖は「三水湖」と名付けられ、湖水では子どもが飛び込んで遊んだり、貸しボートを借りて漕ぎ出したりすることができ、引き続き名勝の賑わいを見せたといえます。

昭和22年、地元の名士である本多静雄氏が、常任理事に加藤唐九郎氏を迎えて「ヤハギ川観光協会」を設置しました。ヤハギ川観光協会の招致により、当時まだラジオ放送であった「NHKのど自慢」がここを訪れています。昭和26年には「夏季文化講座」と題して、加藤唐九郎氏が作陶実技指導をおこなったり、柳宗悦が講演をおこなったりしています。

今日では、右岸側に民芸館を配し、両岸には越戸公

園・古単水辺公園があり、また周辺の公園や散策路なども地元からの熱望が高く、徐々に整備されている状況です。このようにして、ここ越戸は、100年に渡って地域の人びとに愛着されてきたのです。それだけから見ても、ここ越戸が単なる「うらみの地」というわけではないことがわかります。

以降では、調査会が収集した資料のうちの何点かをご紹介しますので、越戸ダムが、単に国策に寄り切られただけのものではなく、まったく別の貌も併せ持つということをお示ししたいと思います。

まず、豊田土地改良区が所有されている資料を何点かご紹介しましょう。以下の写真は、初期の越戸ダム設計図面です。「流筏路」という表記が見られ、越戸ダムは当初、筏流しが存在することを前提にして設計されていたことがわかります（写真1、2）。

ただ、その後の図面からはこの流筏路が消えています。

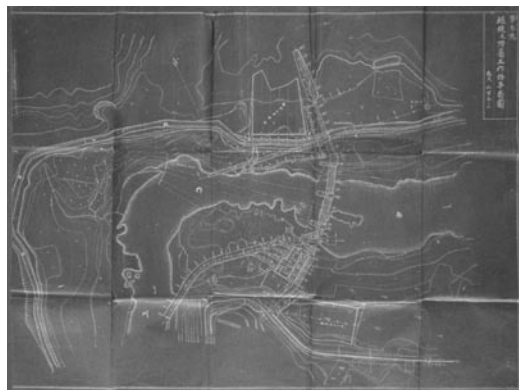


写真1

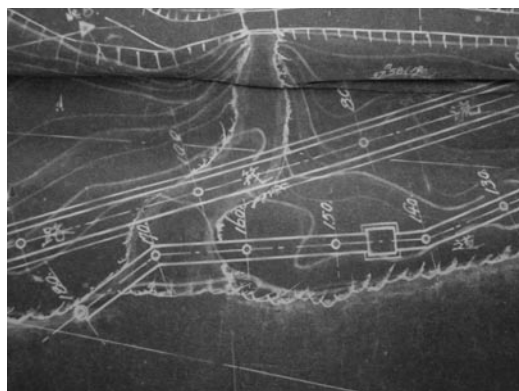


写真2

写真1、2「堰堤及附属工作物平面図」
(豊田土地改良区所蔵)

第二の資料は、「矢作川幹川発電水利使用許可申請書添属書写」です。その中には、三河水力電気株式会社発起人として、以下に上げた人物たちの他、合計19人の名が挙げられています。

高濱甚七（材木商・名古屋市熱田区）
加藤周太郎（製材業・東加茂郡足助町）
判治孫三郎（農・幡豆郡吉田村）
杉浦福太郎（鉾山業・碧海郡旭村）
杉浦政七（綿花業・碧海郡旭村）
小林嘉太郎（綿糸業・碧海郡旭村）
杉浦竹三郎（農・碧海郡安城町）
今井善六（材木商・今井善六）
深見林工門（呉服商・東加茂郡足助町）

この資料のおもしろいところは、百々貯木場の経営者であった今井善六氏（14代目）が発起人として名を連ねていることです。筏師たちの生計を危うくし、矢作川流域の林業自体をも危うくしかねない計画に、なぜ今井氏が積極的に参加していたのでしょうか。

「添属書写」には、今井氏の名の上に二重線が引かれてあり、「大正九年死亡」との添え書きがあります。また、大正10年に三河水力電気が枝下用水組合（現・豊田土地改良区）と取り交わした「枝下用水組合ト三河電気株式会社 協定書及覚書写」には後継者の今井善六氏（15代目）の名がありません。

今井氏（14代目）が三河水力電気の発起人に名を連ねたこと、今井善六氏（15代目）がここに名を連ねなかったことには、さまざまな経緯があったことでしょう。ここで、次の資料を紹介して、その経緯の一側面を明らかにしておきたいと思います。

次の資料は、国立公文書館が所有する、今井善六氏（15代目）らが昭和3年に作成した「陳情書」です。そこには、灌漑期間の筏流しが困難となるおそれがあり、陸上交通も発達し始めていることから、計画されていた流筏路をやめ、その分の予算で、越戸ダム湛水区間内に陸揚場と貯木場を建設して欲しいということが書かれています。つまり今井家は、林業が時代柄危機的状況にあることを知りつつ、流筏路や新貯木場といった方策を試行錯誤するために、越戸ダム計画に積極参加していたと考えることができるでしょう。

最後に、先ほど挙げた「協定書及覚書写」から、興味深い表記がありましたのでご紹介します。なお、漢字や仮名遣いなどを一部現代表記にあらためました。

第六條 将来甲（枝下用水普通水利組合：著者注）が自ら動力の必要を生じたる場合又は地方産業開発上の動力需用者を生じたる場合及三河鉄道が其の動力を電化せんとする場合に於ては乙（三河水力電気株式会社：著者注）は需用者の要求に応じ愛知県内に於ける一般電力供給業者公表標準料金平均額以下の料金を以て供給すること

枝下用水自身が動力を必要とした場合が条文に上がることは不自然ではありませんが、この協定に三河鉄道が加わることにはいったいどんな経緯があったのでしょうか（三河鉄道の電化は大正13年、築山,1986）。更に、「地方産業開発上の動力需用者」というのは、あまりに漠然とした言葉です。昭和12年にはトヨタ自動車^{トヨタ}が本社をこの地域に構えることになるのですが、もしこの条文がそれを前提としていなかったのであれば、三河水力電気としては大散財となった可能性もあるのです。

私は、以下のようにとらえています。西三河地方の有志たちが三河水力電気を発起し、同じく西三河地方の有志たちであるところの枝下用水がそこへ乗り入れ、単に農業用水問題ばかりにとどまらず、地域住民の幸福について考え合った。このことが、今井氏の名が三河水力電気側に在ったり陳情する側に移ったり、また枝下用水が三河鉄道や地元産業への貢献を三河水力電気と協定したりという、不可解な出来事の向こうにある、越戸ダム^{カハ}のもう一つの貌^{かたち}なのではないか。だからこそここ越戸地域は、決して「うらみの地」というばかりではなく、地域の人びとにずっと愛着され続けたのではないかと考えられます。

（豊田市史資料調査会 高橋 聡）

† 参考資料

「高橋村誌」（1985.6.30 高橋村誌編さん委員会）
「本多家資料」（豊田市民芸館所蔵）
「堰堤及附属工作物平面図」（豊田土地改良区所蔵）
「矢作川幹川発電水利使用許可申請書添属書写」（豊田土地改良区所蔵）
「枝下用水組合ト三河電気株式会社協定書及覚書写」（豊田土地改良区所蔵）
「陳情書」（国立公文書館所蔵）

文化財シリーズ

69

登録文化財
旧三河広瀬駅
旧西中金駅

旧三河広瀬駅は、昭和2年（1927）に開業しました。かつては耐火粘土の積出しなど貨物の取り扱いでにぎわった駅も平成16年（2004）の名鉄三河線（猿投駅－西中金駅間）の廃線とともにその役目を終えました。駅舎は木造平屋建て、切妻屋根に鉄板が葺かれ、下見板張りの外装となっています。待合室のほぼ全ての外壁に付けられた大きなガラス障子が駅舎全体に軽快な印象を与えます。規模は桁行11m・梁間4.4m、建築面積50㎡です。駅舎北側にあるプラットホームは全長約80m・幅2～2.6mで、開業当時の遺構と考えられる切石積みで中央部分に残っています。また、現在は埋もれていますが、貨車に荷物を積み込むための施設も確認できます。

旧西中金駅は、昭和3年（1928）に開業し、平成16年の廃線までは、名鉄三河線の終着駅でした。かつては竹材などの貨物の取り扱いによりにぎわっていました。木造平屋建の駅舎は昭和5年（1930）に建設され、外装は下見板張りで、切妻屋根に鉄板が葺かれています。規模は桁行14m・梁間3.6m、建築面積54㎡です。プラットホームは花崗岩の切石積みで、全長約36m・幅約3.6mを測ります。小規模な改変を受けていますが、全体的には駅が開業した当時の姿を留めています。



旧三河広瀬駅

資料館 NEWS

「夏休み子ども月間」

子どもから大人まで汗を流しながら、一生懸命火起こしに挑戦していました。煙が出てくるまでやり続けることも大変ですが、火種ができるまでにはさらにもうひとがんばりが必要です。マッチやライターを使わない火起こしの大変さと、面白さを体験してもらいました。



火起こしの様子

お宝探しなぞときラリーでは郷土資料館の各場所に隠された文字を、家族で協力して探していました。

また昔の道具体験コーナーでは、ますを使って米を量ったり、茶臼をまわして茶の葉を粉にしたり、着物を着たりして昔の暮らしを楽しみながら体験している様子が印象的でした。

8月11日に行われた特別展プレイベント「製塩土器で塩作り」講座で9組15名が、奈良時代の方法で塩作



かん水を煮詰めている様子



ガーゼと塩で氷を釣っている様子

りに挑戦しました。かん水と呼ばれる濃い塩水（約16%）を製塩土器の中で煮詰め水分をとばしていくと、はじめはどろどろとした塩が出来、さらに焼いていくと塩が出来上がりました。暑い中での作業でしたが、作ったばかりの塩を食べると「家で食べる塩よりもおいしい!」「旨味がある」と感激の声があがりました。また塩の性質を利用して、氷を釣ってみたり、じゃがいもを浮かせてみる実験を行いました。塩作りの大変さと塩の不思議さを体感した1日になりました。

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）

入場料 無料（特別展開催中は有料）

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.69 ■

平成21年9月10日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。